

[Research Report]

Student understanding of the elderly in gerontological nursing practice

— Analysis based on case study contents —

Masumi Miyaji*, Yayoi Ohmachi* and Yoko Taira**

* Aino University, Department of Nursing, Faculty of Nursing and Rehabilitations

** Nakamura public health center in Nagoya

Abstract

Nursing practice is an integral part of nursing education as it provides necessary experience leading to practical capability and development of the human-relations formation process.

The purpose of this study is to clarify the viewpoint and technique of students in acquiring an understanding of the elderly in gerontological nursing practice.

We analyzed case studies of 38 students and classified the findings into categories and sub-categories. Consequently, the results were divided into 4 categories: <Observation>, <Deepening of Communication>, <Affirmation of Lifestyle> and <Creation of a Safe and Secure Environment>.

Through this training, students gained a new perspective in regard to the thought process of the elderly and the importance of a respectful manner when interacting with them.

Students remarked that previously they had been reluctant to communicate with the elderly directly, but that they now feel more confident in their abilities of communication, assessment and observation in their role of providing care and assistance to the elderly.

Key words : gerontological nursing practice, student, understanding of the elderly, case study

老年看護学実習における学生の高齢者理解

—— ケーススタディの内容分析から ——

宮地真澄*, 大町弥生*, 平良陽子**

【要旨】 看護学教育において、臨地実習は、看護実践能力の育成や人間関係形成過程を伴う体験学習として重要な意味をもつ。そこで、老年看護学実習において学生は、どのような視点や看護技術を用いて高齢者を理解していたのかを明らかにすることを目的として研究を行った。38名の学生のケーススタディを対象に内容を分析し、サブカテゴリ、カテゴリを抽出した。その結果「観察をする」「コミュニケーションを深める」「生き方を肯定する」「安心できる環境をつくる」の4個のカテゴリに分類された。この実習で学生は、これらの視点や看護技術を用いて高齢者の思いや考えを理解し、その人の意思を尊重する行動をしていた。自分とは違う人々と正面から向き合うことを避ける傾向があるとされている学生が、高齢者との援助過程において、コミュニケーション力、アセスメント力、観察する力が育成されたと推察される。

キーワード：老年看護学実習、学生、高齢者理解、ケーススタディ

I. はじめに

2002年文部科学省の「看護学教育の在り方に関する検討会」の報告の中で、看護実践能力を大学における看護教育で育成すべきものと明確にし、現在、各大学で独自の取り組みや検討が行われている。その中で看護基礎教育においては、質の高い看護職者の育成をめざし、生涯にわたり専門性を深めていくための基礎能力を確実に培っておくこと、すなわち、看護生涯学習の基盤を創ることが大切であるとされている。看護実践能力は、学生が患者やその家族と向き合い、学生自ら看護行為を行うという過程で、自己の新たな発見をしながら育まれていくものである。そこで看護基礎教育課程の教員は、学生が卒業時、看護実践能力の目標に到達できるよう教育を行っていくことが求めら

れている。看護学教育において、生活経験の少ない学生が、学内で習得した知識・技術・態度を統合し、患者やその家族または他の医療関係者と関わり、さまざまな反応を得て、人間関係を深めながら実習するという臨地実習は、学生にとって大きな意義がある²⁾。

老年看護学では、高齢者をどのように理解するのかという「対象論」と、対象に働きかける「方法論」により、質の高い実践を導くことをめざしている³⁾。A大学の老年看護学実習は、表1に示した目的・目標で、3年次後期から4年次前期の間の領域別の臨地実習の中で、病棟と特別養護老人ホームにおいて2週間、実施している。それぞれの施設で高齢者1名ずつを受け持ち、病棟では看護過程の展開、施設では学生自身の課題に沿う形で高齢者を受け持ち、ケアを受けながら生活する高齢者の学習をしている。実習終了後、受け

* 藍野大学医療保健学部看護学科

** 名古屋市中山保健所

表1 A大学の老年看護学実習の目的・目標

【目的】 学内で学んだ知識・技術を統合し、高齢者への看護の実践を通して基礎的臨床能力を身につける。
【目標】 1) 高齢者の身体的・心理的・社会的特性を理解する。 2) 高齢者の健康状態をアセスメントし、看護を実践する。 3) 看護を実践した結果を評価・修正する。 4) 高齢者の日常生活を援助するための基本的な看護技術と豊かな老年観を養う。 5) 高齢者に対する保健・医療・福祉の現状を把握し、そこで働く看護職の役割と機能を理解する。

持った高齢者から学んだことをケーススタディとして提出させている。

“ケーススタディ”とは、Marilyn H. Oermann, Kathleen B. Gaberson⁴⁾によると、高次の認知能力を評価する方法で、事例を詳細に、そして深く分析し、結論を出すための根拠を記述するものである。本実習においては、学生が実践した看護について事例を振り返り、詳細に分析し、テーマに沿って文献学習をし、記述をしたものである。

老年看護学実習での実習記録を分析した研究には、古村ら⁵⁾の健康な高齢者を対象とした実習の学びや、水口ら⁶⁾の特別養護老人ホームにおける実習の学習内容を分析した報告はあるが、老年看護学実習における“高齢者理解”という視点での報告は少ない。

現代の若者は、他者への関心やものごとに取り組むエネルギーが不足しており、多様な人々と正面から向きあうことを避ける傾向が強くなり、コミュニケーションの力が弱くなっている⁷⁾と言われている。また、高齢者との同居経験も少なく、たとえ同居していても接触がないため高齢者の生活を具体的にイメージできない状況にある⁸⁾。学生が学内で学んだ知識・技術・態度を統合し、看護実践を通して、どのようなことを学んだかを明らかにすることは、看護実践能力の到達度を明確にし、今後の臨地実習のあり方を検討することに意義があると考えた。

そこで本研究では、老年看護学実習において、学生はどのような視点や看護技術を用いて、高齢者を理解していたのかを明らかにすることを目的とした。

II. 方法

本研究は、質的記述研究を用いた。それは、老年看護学実習において、学生が高齢者をどのように理解し学んだかについて明らかにするためには、ケーススタ

ディの記述内容を分析する質的記述研究を用いることが相応しいと考えたからである。

1. 用語の操作定義

【学生】

本研究では、A大学の看護基礎教育課程で学ぶ、3年次に始まる老年看護学実習を終えた学生とする。

【高齢者】

65歳以上の方で、老年看護学実習で学生が受け持ち、ケアを実践した患者および施設内の住民とする。

2. 対象

2003年10月から2004年2月までの期間で、A大学で老年看護学実習を行った学生のケーススタディである。

3. 分析方法

内容分析の手法を用いて分析した。内容分析とは、表明されたコミュニケーション内容を客観的、体系的、数量的に記述するための調査技法であり、記述された資料やデータに何が記述されていたかをカテゴリシステムとして体系的に表す方法である⁹⁾。ケーススタディの内容を「学生の高齢者理解」の視点で読み、1文に1意味が含まれるようにデータを抽出し、表現や意味内容を検討した。類似性に基づき、サブカテゴリ、カテゴリを抽出した。カテゴリの信頼性・妥当性を確保するために、質的研究の実践者である研究者にスーパーバイズを受け、共同研究者3名で合意が得られるまで検討を繰り返した。

4. 倫理的配慮

臨地実習における実習記録およびケーススタディを作成する上で、受け持った高齢者の個人が特定されないよう記述するよう、学生に指導・説明した。

そして、成績評価終了後に、本研究の趣旨を説明した。研究への参加・不参加は自由であること、研究に参加しなくても成績評価に関係がなく、不利益はないこと、データは匿名性を確保した上で用いることを説明し、了解を得た。データの取り扱いについては、施錠できる場所に厳重に保管し、データ分析が終了したところで、シュレッダーにて処理し、廃棄した。

Ⅲ. 結 果

学生45名中38名から、ケーススタディの内容を本研究のデータとして取り扱うことの理解を得た。ケーススタディの内容を分析した結果、347のデータが抽出された。その中から16個のサブカテゴリ、4個のカテゴリに分類された。データの数は、表2の()で示した。なお、文中ではカテゴリを【 】、サブカテゴリを「 」の記号を用いて表した。

1) 【観察をする】

このカテゴリは、学生が高齢者と関わる中で、高齢者を身体的・精神的・社会的側面から、生きてきた生活背景や価値観について観察したことを説明するものである。「生活史の理解をする」「精神面のアセスメントをする」「フィジカルアセスメントをする」「家族とのつながりの情報を得る」の4つのサブカテゴリから構成されている。以下にサブカテゴリと代表的なデータを示す。

「生活史の理解をする」

- ・高齢者が障害を受け入れていくことは、長年築き上げてきた生活を基盤として、その中で障害による変化を自分の生活の中うまく取り入れ、その人らしい生活を送ることではないか。
- ・高齢者にとって生きがいというのは、「これが生きがいです」と言えるものでなくても、その方の生活観や役割、存在感をこちらが理解し、認めていくことである。

表2 学生が高齢者理解に用いた視点・看護技術 (n=347)

カテゴリ	サブカテゴリ () はデータ数
観察をする	生活史の理解をする (39)
	精神面のアセスメントをする (34)
	フィジカルアセスメントをする (27)
	家族とのつながりの情報を得る (13)
コミュニケーションを深める	五感を使う (26)
	学生自身の思いを言葉に出す (18)
	コミュニケーションの方法を選ぶ (12)
	信頼関係を築く (8)
生き方を肯定する	高齢者の深い思いを知る (34)
	頑張りを認める (25)
	看守 (17)
	残存能力を認める (16)
安心できる環境をつくる	その人らしい生活を支える (52)
	安心できる場所を整える (11)
	安心できる人間関係を築く (9)

「精神面のアセスメントをする」

- ・障害をもつということは、身体的な喪失だけではなく、精神的な部分での喪失、つまり今まで自分でできていたことが人の手を借りなければできなくなることに對するやるせなさ等も同時に存在する。
- ・コミュニケーションに障害があり、基本的な要求さえも伝えられない患者は、強い不安感や疎外感、怒りや不満を感じるだろう。高齢者の反応や行動をよく観察することは高齢者のニードを察知するために重要な関わりであった。

「フィジカルアセスメントをする」

- ・言葉による訴えがないということは、重大な身体の状態を見落とす危険も持っており、看護者の健康状態の観察が問われるということも考えさせられた。
- ・言語障害としてだけでなく、高齢者のコミュニケーション障害としての視点から捉えると、視力や聴力の低下、記憶力の低下など加齢に伴う機能低下によって生じる様々な問題がある。

「家族とのつながりの情報を得る」

- ・生活の仕方や環境などの違いはあるにせよ、高齢者にとって家族はとてども信頼のできる大切な存在であることがわかった。

2) 【コミュニケーションを深める】

このカテゴリは、学生が言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーションを通して、高齢者を理解しようとし、そのために学生自身が高齢者の反応をふまえて、相手に自分の思いを伝えることを学んでいたことを説明するものである。「五感を使う」「学生自身の思いを言葉に出す」「コミュニケーションの方法を選ぶ」「信頼関係を築く」「高齢者からの気遣いを感じとる」の5つのサブカテゴリから構成されている。以下にサブカテゴリと代表的なデータを示す。

「五感を使う」

- ・質問に答える時のAさんの表情やジェスチャーなどから「すみません」という語句には、「ありがとう」という提案を肯定する意味、「申し訳ない」という意味、「遠慮」している意味など様々な思いや意味があるということを知り、重度の失語症の方の思いを理解するためには、

非言語的な反応を見落とさずに受けとめることが重要である。

- ・(学生の)表情も緊張によってこわばったものになっていた時もあったらうから、心に余裕をもって、言葉だけでなく身体全体で表現する必要があると考える。アイコンタクトも意識するべきである。

「学生自身の思いを言葉に出す」

- ・時には看護者は、患者さんにつらいこと、苦しいこと、悩みなどを「一緒に考えて行きたいのです」というような言葉として伝えていくことも大切なことだということや、患者さんの状態を知りたいときはその人に合わせた方法で工夫して具体的に聞いていくことである。
- ・できているところを見て、「すごいなあ」と関心を寄せていることを素直に伝えて評価することが自立の支援になっているということに気がつくことができた。

「コミュニケーションの方法を選ぶ」

- ・難聴の方との話し方として、ゆっくりとはっきり区切って話す、低めの声、近くで向き合って話すことが求められる。
- ・私たちは、その方に合わせたコミュニケーションを選ぶことが必要である。

「信頼関係を築く」

- ・看護者側は顔の表情、刺激に対する身体の動きなどから、その人の意思をその人から感じるができるだけの感受性が必要であるし、また信頼関係を築く上で自分や他人の行動がとる行動の意識を高めることである。

「高齢者からの気遣いを感じとる」

- ・「すみません」という言葉は“ありがとう”という意味ではないか。援助をした後、「すみません」と言われたときに、「迷惑なことじゃないですよ」と声かけすると、「ありがとう」と言っていた。このことから、(施設内で)介護を受けることが、“ご厄介になっている”ということに結びついているのではないか。
- ・Bさんは、実際にできたことができなくなり、そのことにより他人に迷惑をかけていると感じておられるようであった。

3)【生き方を肯定する】

このカテゴリは、学生が高齢者の残存能力や頑張っている姿を認め、その前向きな姿を肯定的に捉え、理解していたことを説明するものがある。「高齢者の深い思いを知る」「頑張りを認める」「看守る」「残存能力を認める」の4つのサブカテゴリから構成されている。以下にサブカテゴリと代表的なデータを示す。

「高齢者の深い思いを知る」

- ・言葉では十分に伝えられないからこそ、よりそれが表情やしぐさとなって表出されようとするその一生懸命な思いを、私たちは対象者の全身の変化を見ながら理解していかねばならない。
- ・「誰にもわかってもらえない」というお気持ちに直面した時、私は(高齢者に)何かしたいと(考え)行動することがわかった。

「頑張りを認める」

- ・CさんもDさんも、あまり自身の口から「つらい」や「しんどい」という発言をされず、できないことは援助を受けて、少しでも自分でできることに前向きであった。

「看守る」

- ・時には時間をとって高齢者の話を傾聴していくことが必要である。
- ・自尊心を尊重し、高齢者のペースに合わせることで、より個別的な対応ができる。

「残存能力を認める」

- ・過度な介助はせず、見守り、その方が頑張っておられる姿に対し、できた所、できる所を評価することが自立の支援である。
- ・靴下のたたみ方を工夫するなどして介護しやすいように(少しの支援で済むように)したり、上半身を使い、できることは自分でされており、他人への気配りもされ生活されている。

4)【安心できる環境をつくる】

このカテゴリは、高齢者の生活に視点をおいた看護のあり方として、物的・人的環境を整えることがその人へのケアにつながると、学生が学んだことを説明するものである。「その人らしい生活を支える」「安心できる場所を整える」「安心できる人間関係を築く」の3つのサブカテゴリから構成されている。以下にサブ

カテゴリと代表的なデータを示す。

「その人らしい生活を支える」

- ・毎日継続的にセルフケア行動をされている中で、看護者は補助具などの工夫をし、資源を与えたり、観察・評価をしたりと、セルフケアすることに価値をおくことができるように精神的・身体的・社会的なサポートを行う必要があるのだと実感した。
- ・高齢者と関わることで、昔どのような生活スタイルだったか考え、その上でその人の個別的なケアへと繋げることが、高齢者の自尊心を尊重したケアとなると考える。

「安心できる場所を整える」

- ・例えば、今残っている能力を使って洗濯物を干すことができるように、環境を整えることではないだろうか。
- ・自分が（高齢者が）どこにいるべきなのかということが確実にわかるものが健忘や痴呆（認知症）のある高齢者にとって、安心感を与えたと感じた。

「安心できる人間関係を築く」

- ・相手に関心をもって関わる姿勢は、対象者を安心させ、“話”を理解してもらったのではなく、“自分自身”を理解してもらったと感じさせる。
- ・二人の高齢者との関わりから、看護者と高齢者との間でなじみの人間関係を築くことの重要性を認識した。

IV. 考 察

1. 学生が高齢者理解に用いた視点・看護技術について

本研究の結果から、図1に示すような学生が高齢者理解に用いた視点・看護技術の関連が導きだされた。学生は【観察をする】ことと、五感を使って【コミュニケーションを深める】ことを通して、病院で療養している高齢者や施設に入居している高齢者を理解しようとしていた。また、高齢者に対して学生自身が感じたことを言葉で表すような【コミュニケーションを深める】ことによって、さらに【観察をする】ことを深めていることが明らかとなった。このような関わりの中で、学生は高齢者の頑張りや残存能力を肯定的にとら

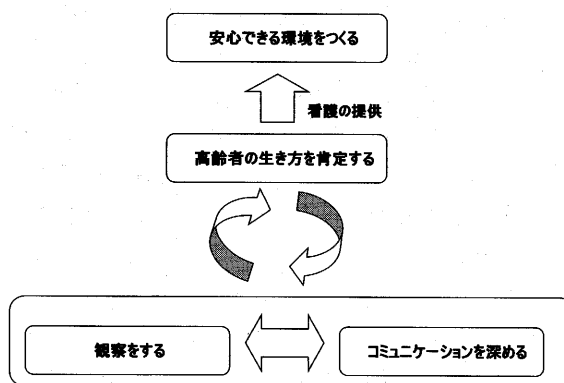


図1 学生が高齢者理解に用いた視点・看護技術の関連

え、【生き方を肯定する】姿勢の重要性を理解していた。そして、高齢者の尊厳のある生活のために【安心できる環境をつくる】という看護の役割を学んでいた。

2. 学生の高齢者理解について

1) 高齢者の生きる姿勢を受けとめる

この実習を通して、学生は看護実践能力として、高齢者の生きる姿勢を肯定的に受けとめようとしていた。さらに「五感を使う」コミュニケーションを通して高齢者の考えを把握しようとする姿勢が明確になった。

自分とは違う人と正面から向き合うことを避ける傾向があると言われている学生が、高齢者のもつ多様性や独自性を理解することは難しい。高齢者との【コミュニケーションを深める】ことについて理解しているサブカテゴリの「学生自身の思いを言葉に出す」において、“一緒に考えていきたいのです”というデータにあるように、学生が自分の言葉で伝える努力をしていることが浮き彫りになった。

看護者が自分の感情や考えを適切に患者に伝えることは、患者の自己表現を促進するとともに、看護者と患者の信頼関係を増す¹⁰⁾と言われている。学生の「その人を知りたい、理解したい」と強く思う気持ちや積極的に高齢者の心をのぞきこもうとする情熱¹¹⁾が、高齢者を肯定的に観察することにつながり、その人の残存能力に気がつき、認めることができると考える。

2) 人と人との信頼関係を築く

人は他者に支えられ、他者を支えていくことを本質的なものとしている。看護は利用者と看護職者との関係において成立するものである¹²⁾。

サブカテゴリの「高齢者の深い思いを知る」を構

成するデータの“一生懸命、表出しようとする高齢者の表情やしぐさ”を学生が受けとめ、情報を交換して相互に考え方や感じ方などを共有することにより、共感的なつながりを持つようとしていることが明らかになった。このことは、人と人との信頼関係を保ちつつ、学生が体験したことをもとに自分のもつ目標に近づけていこうとする学習過程であると考えられる。

【安心できる環境をつくる】を構成するサブカテゴリ「安心できる人間関係を築く」において、“話を理解してもらったのではなく、高齢者が自分自身を理解してもらったと感じさせる”というデータから、高齢者の物的環境を整えるとともに、人的環境の重要性を示している。高齢者自身のこれまでの長年の習慣や生活環境での過ごし方などと、現在の支援される生活を対比させてアセスメントすることが、より安心できる環境の提供につながることを理解していた。

これらのことは、高齢者のよりよく生きるための条件をいかに整えるかという看護職者としての役割¹³⁾について学ぶ機会となった。

以上のことから、学生は高齢者との関わりの中で、その人の生活を考えることで、高齢者の意思を尊重することを学んでいた。その過程において、多様な年代や立場の人を理解しようとするコミュニケーション力、アセスメント力、観察する力が育成されたと推察される。

今後も学生が、幅広い視野から高齢者とその人の生活を理解し、確実な倫理観をもって行動できるように臨地実習での学習を支援していきたい。

V. ま と め

本研究は、学生が老年看護学実習において、どのように高齢者を理解したかを明らかにするために、ケーススタディの内容分析を行った。その結果以下のことが明らかになった。

1. 学生は【観察をする】ことと、五感を使って【コミュニケーションを深める】ことを通して、【観察をする】ことを深めており、このような関わりの中で高齢者の【生き方を肯定する】姿勢の重要性や【安心できる環境をつくる】という看護の役割を学んでいた。
2. 学生は本実習において、高齢者との援助過程について学習をしていた。その過程において、コミュニケーション力、アセスメント力、観察す

る力が育成されたと推察された。

なお本研究の一部は、第18回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会（金沢）で報告した。

引用文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会（2004年3月26日）：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標、文部科学省、p. 6.
- 2) 宮地 緑, 藍原キミヨ, 星和美編著, 松木光子監修. 看護学臨地実習ハンドブック — 基本的考え方とすすめ方—. 京都：金芳堂；1999. p. 8.
- 3) 太田喜久子. 老年看護方法論の確立をめざして. 老年看護学 2003；7（2）：4-8.
- 4) Oermann MH, Gaberson KB, 舟島なをみ監訳. 看護学教育における講義・演習・実習の評価. 東京：医学書院；2001. p. 144-5.
- 5) 古村美津代, 中島洋子. 健康な高齢者とのふれあいを通しての実習の学び — 実習記録の分析から —. 老年看護学 2003；8（1）：78-85.
- 6) 水口陽子, 田中キミ子. 特別養護老人ホームにおける老人看護学実習の学習内容 — 実習記録の分析から —. 老年看護学 2000；5（1）：131-9.
- 7) 佛教大学. 平成16年度特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）採択記念シンポジウム, 「特色ある大学教育支援プログラム」事例集. 2004.
- 8) 5) 前掲書, p. 78.
- 9) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 東京：医学書院；1999. p. 42-53.
- 10) 岡堂哲雄. ナースのための心理学④人間関係論入門. 東京：金子書房. 2000. p. 50.
- 11) 服部祥子. 人を育む人間関係論. 東京：医学書院；2003. p. 29.
- 12) 森岡正博. 「ささえあい」の人間学. 京都：法蔵館；1994. p. 20.
- 13) 11) 前掲書, p. 29.

参考文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会（2002年3月26日）：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて、文部科学省.
- 2) 中西睦子. 臨床教育論. 東京：ゆみる出版；1998.
- 3) 流石ゆり子, 亀山直子. 『健康高齢者実習』の意義 — 学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討 —. 老年看護学 2004；9（1）：65-75.
- 4) 高橋順一, 渡辺文夫, 大淵憲一. 人間科学研究法ハンドブック. 京都：ナカニシヤ出版；1998. p. 75-81.
- 5) 田中キミ子. 高齢者とのコミュニケーション・スキル. 東京：中央法規；2001.
- 6) 大町弥生, 平良陽子. 老年看護学実習におけるコミュニケーション能力を補うための学習. 日本看護学教育学会誌 2004；14：239.